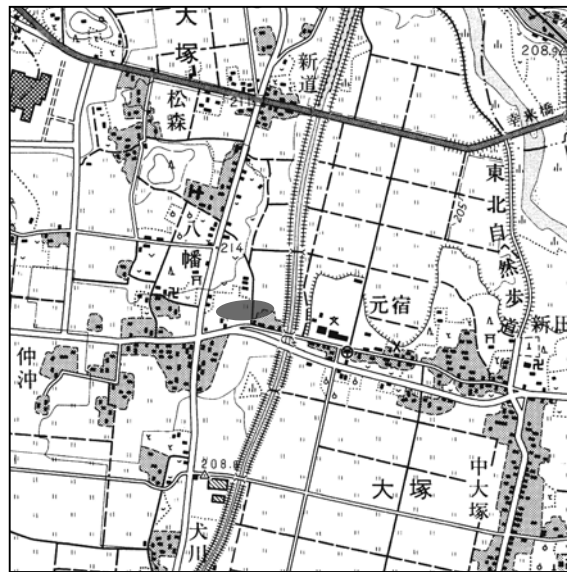


やわたいち  
八幡一遺跡

遺跡番号 382-194  
 調査次数 第1次  
 所在地 山形県東置賜郡川西町大字西大塚字八幡一  
 北緯・東経 38度02分40秒・140度03分54秒  
 調査委託者 国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所  
 起因事業 一般国道113号梨郷道路事業  
 調査面積 9,900㎡  
 受託期間 平成26年4月1日～平成27年3月31日  
 現地調査 平成26年5月20日～12月19日  
 調査担当者 水戸部秀樹（現場責任者）・市川光紀  
 高柳俊輔・渡邊安奈  
 調査協力 川西町教育委員会・置賜教育事務所  
 遺跡種別 集落跡  
 時代 古墳時代・奈良時代・平安時代・中世・近世  
 遺構 井戸・土坑・柱穴・木棺墓・旧河道  
 遺物 土師器・須恵器・陶磁器・石器・石製品・木製品・古銭（文化財認定箱数：120箱）



遺跡位置図（1：50,000）

### 調査の概要

八幡一遺跡は、最上川が形成した河岸段丘の北側に位置している。遺跡のすぐ東側を流れる元宿川は、まもなく最上川へと合流する。遺跡のすぐ東側を流れる元宿川は、まもなく最上川へと合流する。昨年度調査が行われた元宿北遺跡は、元宿川の対岸に位置している。遺跡の主な時代は、平安時代や中世であるが、出土した遺物には縄文時代から近世までのものが含まれていた。また調査区内からは近現代の用水路跡も検出されており、耕地整理前の水田区画が確認された。

### 遺構と遺物

南北約60m、東西約180mを測る調査区の中央部で、東西に伸びる旧河道が検出された。かつては水が流れており、東側の元宿川へと合流したのであろうが、やがて水の流れは途絶えてしまい湿地に変わったようである。内部からは縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世の遺物が出土しているが、この湿地内で使用されたものではなく、調査区の南北にある微高地上から廃棄されたものと考えられる。この旧河道の北岸から大変興味深い遺物が出土しており、調査区の北側に未発見の重要な遺跡が存在していることが予想された。

井戸は4基確認されており、井戸3・4は素掘り、井戸1・2は井戸枠を有するものであった。井戸1（写真2）の掘方は、直径1.4m、深さ1mほどで、内部から木製の井戸枠が検出された。井戸枠の四辺に並べられた縦板は、その内側に設置された横棧によって、倒れないように固定される。横棧は、井戸枠内部の四隅に立てられた柱にホゾを使ってはめ込まれており、その接合部には木製の楔が打ち込まれている。井戸枠の内部からは、曲物3点、砥石1点、陶器、土師器などが出土した。

井戸2（写真3・4）からも同様に曲物1点、曲物底板1点、そして木槌1点が出土した。井戸の掘り方は大きく直径2.5mを測る。本来は井戸枠が設置されていたと考えられるが、すでに抜き取られている状態であった。

素掘りの井戸3（写真5）の深さは3.3m、井戸4（写真6）が2.3mで、いずれも平面形は円形である。井戸3からは、9世紀頃の須恵器の蓋が出土している。それぞれの井戸の周囲には、複数の円筒形の土坑が検出され、埋土の土層を観察すると短期間で埋め戻されていることが分かった。地下水の水脈を求めて試し掘りを行っていたのだろうか。



写真1 調査区全景（合成写真）

近世の木棺墓（写真 7）からは、当時の葬送儀礼に関わったと考えられる遺物として、銅銭 3 枚、唐破風状に成形され墨描きの施された板状木製品、17 世紀の磁器（肥前）などが出土した。なお、遺体や木棺の上半部は失われていた。

調査区西半部からは、多数の柱穴が検出されており、掘立柱建物などが建てられていたと考えられる。柱穴からは 16 世紀に属する瀬戸焼の天目茶碗が出土している。これらの柱穴群は、旧河道上にも分布していることから、16 世紀頃までには、河川は完全に埋没していたと考えられる。

出土した遺物の中で特に重要なものとして挙げられるのが、平安時代（9 世紀前半）に属する刻書土器（写真 8）と鎌倉時代（13 世紀）に属する滑石製石鍋（写真 9）である。いずれも旧河道の北端から出土している。刻書された土器は、須恵器の小型壺であり、法会などで使用する水瓶あるいは浄瓶という仏具に相当する。底部には『佛法爲』という文字が刻まれている。また 3 文字目の『爲』は楷書ではなくくずし字であると考えられる（資料 1）。刻書は、土器の表面に文字を刻み入れる手法であり、焼成前に行われる。そのため土器を製作する工房内で書き入れられなければならない。刻書が工房の職人によるものなのか、あるいは工房に赴いた僧侶などによるものか議論が分かれるところである。『佛法』とは仏教と同義であり、仏教を信仰する人々が使用していたのであろう。この刻書土器は、旧河道の北側にある微高地上から廃棄されたものであり、北側の微高地上に、仏教に係わる何らかの施設が存在していたことを示唆するものである。県内では『佛』と刻書された土器の出土例は、米沢市の横山 C 遺跡に次いで二つ目となる。また川西町の道伝遺跡からは『佛』と墨書された土器が出土している。

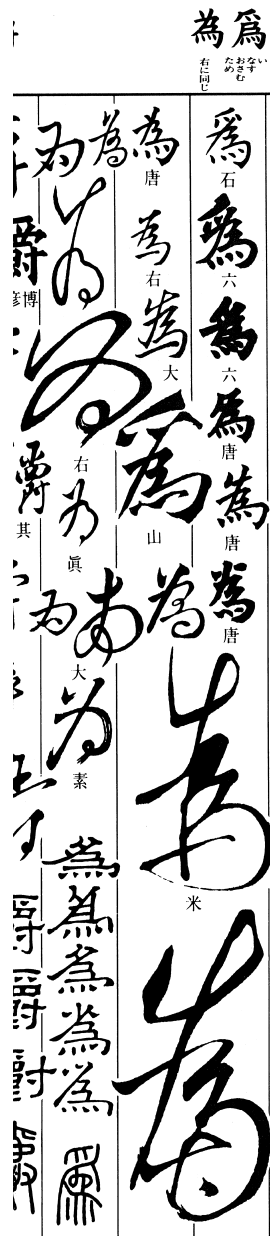
滑石製石鍋（写真 9）は、九州北部で生産され、西日本では数多くの出土例がある。東日本においては、鎌倉以外の地域から出土することは稀であり、県内では 3 例目となっている。当遺跡で出土した石製石鍋は 13 世紀のものであり、鎌倉幕府の関係者がもたらしたものかも知れない。やはり北側の微高地上から廃棄されたと考えられ、中世に至っても何らかの施設が存在していたと考えられる。

ほかには、13 世紀頃の中国産青磁や 13～14 世紀頃の珠洲焼の甕、14～15 世紀と考えられる古瀬戸の碗や皿が旧河道より出土している。また供養のための板碑や石

灯籠、石塔あるいは宝篋印塔の最上段に据える部品である相輪も出土しており、中世においても仏教との深い関わりを示す遺物が目立つ。さらに時期は不明であるが、石製陽物が 1 点出土している。

### まとめ

調査区から出土した遺物のほとんどは、旧河道からのものであり、周囲の微高地上から廃棄されたものと考えられる。遺物の年代は縄文時代から近世までであり、絶えず人々の暮らしが営まれていたことを示している。特に古代以降になると、出土遺物が増え、また刻書土器や滑石製石鍋などの特殊な遺物が含まれるようになる。調査区中央部の旧河道から多様な遺物が出土したことから、調査区の周辺の様相についても重要な手がかりを得られたと言える。



資料 1 『五体字類』より



写真2 井戸1の井戸枠（北から）



写真3 井戸2の断面（北から）



写真4 井戸2曲物出土状況（南から）



写真5 井戸3完掘状況（東から）



写真6 井戸4完掘状況（西から）



写真7 木棺墓（南東から）



写真8 刻書土器出土状況



写真9 滑石製石鍋